

Title	ネットワーク・ミュージッキング : 「参照の時代」の音楽と文化
Author(s)	井手口, 彰典
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47107
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	井手口 彰典
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 20795 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	ネットワーク・ミュージッキング — 「参照の時代」の音楽と文化—
論文審査委員	(主査) 助教授 伊東 信宏 (副査) 教授 根岸 一美 教授 永田 靖 教授 下條 真司

論文内容の要旨

本論文は、「録音された音楽」を対象とし、それが録音テープや CD といった「所有」の対象から、主としてウェブ上での「参照」の対象へと変化しつつある、という見解に立脚し、その変化の様相を歴史的、文化的に分析するものである。本論文の主張によれば、我々はいまや様々な媒体に記録されてきた録音、日々生み出される音楽データなど、大量の音源を有しているが、それらは一人の人間が自分のものとして所有するにはあまりに量が多く、その故にこれまでそれらを各自が取捨選択して収集し、分類し、整理してきた、ということになる。しかし、急激な勢いで普及を続ける高速情報通信ネットワークは、それらの録音を、自分のハードディスクに保存するかわりに、必要になったときに必要とされる場所で「参照」する、という聴取形態の可能性を示しはじめている。つまり、地球上のあらゆる場所で大量のデータのやりとりが可能になったとき、我々はもはや自分のものとして、なんらかの録音物を所有することなく、どこかに一元的に保存されている録音データを自由に引き出し、瞬時にそれを呼び出して聴取する、というようなことが可能になる、というのである。

もしこのようなことが本当に可能になったとき、それは単なる「手段」の変化を超えて、音楽聴取の性質そのものに影響を及ぼす。ちょうど、レコードの誕生が、それまでライブの演奏を聴くしかなかった音楽というものに本質的な変化をもたらしたのと同じように、この「参照」的な音楽聴取はやはり音楽実践に変化をもたらすだろう——これが、本論文の基本的視座である。ただし、本論文はそのような未来予測を主体とするものではなく、むしろ現代の音楽実践をめぐる状況を、デジタル技術を中心とする技術的側面と文化的側面から精密に検討し、さらにそれらの技術が歴史的に持っている意味について慎重な考察を加えるものである。

論文は序章とそれに続く七つの章から成る。第 1 章は本論文の全体を貫く主題ともいべきデジタル録音技術について、その技術的な歴史と意味を論じている。以下、第 2 章では近年問題になっているデジタル・コピーの問題が扱われ、第 3 章では iPod をはじめとするデジタル・オーディオ・プレイヤーをめぐる問題が、第 4 章では Winny のようなファイル共有ソフトによる音楽データのやりとりをめぐる問題が、そして第 5 章では音楽配信サービスの問題が、それぞれ論じられる。これら第 2 章から第 5 章までの議論は、第 1 章で論じられた「デジタル録音」というものが、現代においてひき起こしつつある問題の諸様相であると言える。そして第 6 章は、一旦過去を振り返り、音楽がデジタル録音以前の歴史において、楽譜や身体といった形でどのように「所有」されてきたか、を論じる。そして終章で、それまでの議論を総括し、現在見えてきている音楽聴取とは「ネットワーク・ミュージッキング」と呼べるようなも

のである、と結論づけられる。この「ネットワーク・ミュージッキング」とは、選択された録音物を個人的に所有するのではなく、全てのデータをネットワーク上に共有し、適宜参照する、という形で聴取を行う音楽実践のことである。そこでは、必要な時にアクセスし、速やかにまたそこから離脱する、というような「軽やかな」音楽聴取が、選択肢として可能になるであろう、として本論文は閉じられる。

論文審査の結果の要旨

本論文に関わる公開口頭試問は2007年2月10日に行われた。技術的な問題について専門的に検証する必要があり、審査委員会は、専門分野、隣接分野の教員のほか、サイバーメディアセンターの下條教授を加えた構成となった。同委員からは、専門的な水準から見ても、本論文が現代の情報通信技術をよくフォローしている、との評価が示された。また、本論文が、全7章の論述を通じて、一貫した文体で論理の破綻もなく明晰に論じられているという点では、全ての審査委員の評価が一致した。だが、その上で、内容について、いくつかの指摘があった。

まず、音楽という経験の「深さ」について、この論文は十分に論じきれていないのではないか、という指摘があった。音楽は、「軽やか」に聴かれるにはとどまらず、時として深く聴き手を揺さぶり、変化させ、決定的な刻印を残してしまうものでもある。そのような「参照」の枠には収まりきらない音楽体験というものをどう考えるか、という点についてさらに慎重な議論が望まれる。さらに、このような「参照」が技術的に可能になるとしても、それが社会制度としてどのように機能するかはまた別の問題であり、そこには新たな形での検閲や選別が生じ得るし、本論文にはそれらへの警戒が足りないのではないか、との指摘もあった。

しかし、本論文が、最新の音楽状況について、技術的な側面を押さえた上で、全く新しい展望を切り拓いてみせたことは確かである。それは現在求められている音楽学の新しい成果として、大きな価値を持っていると言って良い。また、指摘されたいくつかの問題も今後の研究を通じて解決してゆくことができると判断される。

以上のことから、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。